

第2分科会 研究課題「子どもの発達に関する課題」

研究主題 「学校における子どもの居場所づくりの推進について」

～各学校における生徒指導（不登校・特別支援・生徒会活動等）に対する教頭の関わりを通して～
日向支会 中学部会

1 主題設定の理由

現在、学校における生徒指導上の諸問題は、極めて多岐にわたるものとなっている。基本的な生活習慣にかかわる日常の生徒指導上の問題はもとより、不登校やいじめや暴力行為などの諸問題も、依然として各学校に共通して見られる。また、学校外においても、少年非行の多様化が見られる。

これらの背景・要因としては、家庭、学校、地域などを含めた社会全体の変化と子どもや大人の意識や行動の変化などを挙げることができる。

高度情報化や都市化、少子化といった急激な社会変化の中、これまでの家庭、学校、地域の個別の教育力では青少年の健全育成に十分に対応できなくなっている状況もある。

生活環境の急な変化、また厳しい環境に身を置く子どもたちが、安心して居られる場所を学校内外に設け、誰一人取り残されることのない教育環境を作っていくことが急務だと考える。

そこで、そのような課題に対し教頭がリーダーシップを発揮した関わり方について、実践的な研究を進めたいと思い本主題を設定した。

2 研究のねらいと概要

これからの社会をたくましく生き抜く資質と能力を育てるための支援体制・教育環境を整え、関係機関との連携を図り、それぞれの課題にどのようなアプローチができるか、各校の取組や各校区における方策についてまとめる。方策を全体で共有することで、共通の視点となるものを見出し、各校連携しながら実践へとつなげていくことをねらいとする。

3 研究の概要と成果

(1) 市教頭会研修会を活用した情報共有

不登校生徒の学校における子どもの居場

所づくりの推進についての市内各学校の取組、及び、教頭の関わりをまとめる。

① 〈A中学校の実践（不登校）〉

今年度より、学級に入りづらい生徒や落ち着かない状況にある生徒が、自分にあったペースで学習・生活する環境を整えるために、県教育委員会指定の校内教育支援センターが設置されている。

現在は、3名の支援員が、日替わりで勤務し、5名ほどの生徒に対し、必要に応じて支援を行っている。

支援内容としては、居場所の提供、学習支援、教育相談が主である。利用する生徒は、午前中利用する生徒もいれば、限られた時間のみ利用する生徒もあり、生徒が安心して入室、生活できるよう環境を整えている。

校内教育支援センター「Z-room」（本校での名称）の管理・運営は、主に生徒指導主事を中心に行っているが、入室に関しては、管理職が必ず確認をしている。また、活用の状況は、記録簿の記入とともに、毎日センターに足を運び確認している。

② 〈B中学校の実践（不登校）〉

令和5年度の途中より、教室に入りづらい生徒たちの居場所として「ハートフル相談室」を設置した。1日1時間程度、本校の学習指導等支援教員（以下担当者）が対応している。これまでの教頭としての関わりは主に次の4点である。

- ・ 担当者が作成した運営方針原案について助言を行う。
- ・ 発災時等に備え、生徒の利用状況を全職員で共有できるよう職員室の掲示を工夫する。
- ・ 担当者の相談を受けるとともに、実態を把握し担当者の負担過重になら

ないよう気をつけておく。

・ 校区内小学校との情報共有を行う。現在、数名の生徒がほぼ休まず利用している。登校日数が確実に増えている生徒もおり、一定の成果が得られている。特別な予算措置がない中での運用開始であるため、部屋の狭さ・冷暖房の未整備、人手不足等の課題も多く、受入人数に限りがあるのが現状である。

③-1 〈C中学校の実践(不登校・特別支援)〉

特別支援学級生徒の別室として使用している多目的室を、学級に入れない生徒の学習支援室と兼用している。通常は、支援学級生徒のクールダウンの場所であるが、不登校生徒が登校できた際には、そこで教室の授業をオンラインで受けられるようにしている。

教頭の関わりとしては、【1】毎朝不登校生徒の登校の有無・予定等を確認する。【2】登校出来た不登校生徒に、授業への参加スタイルを確認する。【3】オンラインが必要な場合は、可能な限り職員を配置し、教頭も協力をする。【4】教室が使用できなかった場合は、他の空き教室を手配する。

不登校生徒の中には、日向市の適応指導教室と多目的室オンライン授業を併用して、学級復帰を目指している生徒もいる。また、小学部のころから同様の支援を受けている生徒もいて、スムーズに継続できている。

③-2 〈C中学校の実践(生徒会活動)〉

本校にはCレンジャーという生徒組織がある。学校内外のボランティア活動に主体的に取り組むメンバーのことを指している。この組織は、生徒会組織図の中にも一部明記されている。

昨年度の実績では、遊歩道清掃、まつりボランティア、日向ビュー園地植栽などがある。今年度は更に、地域にある大型商業施設の周辺で行われたスタンプラリーのボランティアにも参加した。

地元のまちづくり協議会と教頭、生徒会担当が、打ち合わせ・調整を行い、活動している。コンセプトは「自分たちの地元は自分た

ちで盛り上げる」としており、教職員は必要最小限の関わりで、あとは子ども達が主体的に地域の行事や学校の課題に取り組むことを目指している。

この取組に不登校傾向の生徒や学校に足が向かなかつた転入生なども数名、名を連ねている。地域の方から感謝される経験をして自己有用感が高まる。また、学級や部活などの既存のチームではない、異年齢集団、この組織の中に自分の居場所を見出した生徒がいると言っても過言ではないと考える。

(2) 研究の成果

① 次年度以降、各校で校内教育支援センター設置が検討される予定である。それに向けて先進的な取組を実施している学校の事例を知り、具体的なイメージをもったり、教頭としてどのような関わりができるか考えたりする機会となった。

② 学校独自で取り組んでいる居場所づくりを知り、その他の学校も学校の環境面や子どもの状況も踏まえて、参考にできる部分は生かすことができた。

4 今後の課題

(1) 校内に教育支援センターを設置し、そこに常駐できる職員が配備されると、子どもの居場所としての選択肢が増える。別室登校や保健室登校、図書室等を活用するなど、教頭がマネジメントできることを具体的に考え実行していく必要がある。

(2) 一人一台端末を利用してリモート授業が実施できるような環境づくりが必要である。必要に応じて自宅に居ながらでも授業が受けられる体制づくりを進めていきたい。